

『冬の日の・・・』

佐倉尚紀

師走の風が窓を揺らし、忙しく音を鳴らしている。先ほどからの、海中を遊泳する無数のプランクトンさながらの細かく舞う雪が、本格的な冬の到来を教えていた。鉛色の風景が真綿のような白色に染まるのももう時間の問題だろう。ここ十年来根雪になる日がどんどんずれている。子供の頃はこの時期すでに雪は第一陣を迎えていたものだ。

時計を気にしながらそろそろ家を出なければ、と思う気持ちを冬嵐が邪魔をする。電車時間は刻々とせまってくる。

「あなた、タクシーが」  
妻が逡巡する私の気持ちを押し出すかのように、予約したタクシーが玄関先に停まったことを告げた。外は寒々とした空模様。

街路樹の残り少ない色あせた葉っぱが凍えながら白く着飾っていた。家人に別れを告げタクシーに乗り込むと、ようやく気持ちも吹っ切れた。ドアの閉まる音と車のエンジン音が見送る妻の声を掻き消したが、腰をかがめた妻の目が何を言ったか私には分かった。単身赴任の暮らしがもう五年を超えた。今年もまた正月は一人で迎えることになる。車窓に街ゆく人々の寒そうで重苦しさを背負いながらも、師走を迎えてせかせかとした姿が目映った。

タクシーが交差点で停まった。  
向かい側の歩道を、買い物カートを押しながら吹雪をぬうようにして、うつむき加減にゆっくりと歩いているおばあさんの姿が目についた。やがてそのおばあさんは、横断歩道を背中を丸め、やはりうつむきながら一歩一歩ゆっくりと渡り始めた。途中で赤信号にならなければ良いがと、ハラハラする気持ちを無視するかのように、タクシーのサイドガラスからフロントガラス越

しにノロノロと通っていく。カートからスパーのレジ袋らしき白っぽいものが目映った。

七十歳代のようにも見受けられた。きっと家庭ではまだ第一線で家事をとっているのだろう。子供世帯とは同居していないのだろうか。老いたご主人と二人暮らしなのだろうか。いや一人かもしれない。吹雪がこれのおばあさんの買い物には酷すぎるように感じられた。時間にすれば数十秒にしかすぎなかったが、私はおばあさんの家庭模様を勝手に想像してしまった。

タクシーは走り出した。師走の人ごみと吹雪の中に、あのおばあさんの姿は見えなくなかった。

私の母は明治生まれで数年前に九十二歳の天寿を全うした。

危篤の報に接し、駆けつけた病室で母は眠っていた。まだ生きていることがその呼

吸のたびに胸が微かに隆起することで確認できた。ときおりいびきに似た声が生のリズムを乱しているように思えた。

どのくらい経つただろうか、もう苦しさに耐えることさえ出来ないのか、寝息が徐々に静かになっていった。小走りに病室に入ってきた当直の医師が沈んだ口調で臨終を告げた。紛れもなく一つの人生が消えたのである。生と死の境はなんと薄くあつげなくもろいもの。ほんの数秒前まで間違いなく生きていた命。白い衣に着替える母をながめ、この小さくなった背中、この細くなった手足の身体から、五十年以上も昔にこの女性から自分が生まれたのだと、そしてこの背中に背負われていたのだと。私は悲しみを超越した不思議な感覚で母というひとりの人間を見つめていた。

小学生の頃だった。  
「シゲル、ついてきな」

母に連れられ徒歩で二時間ほどの山林ま

で薪を拾いに行った。その近辺に住む人の所有林であるが、別に樹木を伐採するわけでもない私たちを自由に入らせてくれた。季節になると自然と地面に落ちる杉の枯れ枝や葉を拾い集めるのである。一時間もとるとたちまち馬籠に一杯になった。ついでに、ところどころに生えていた茶色のきのこも幾つか採った。私の倍も詰めて重くなった馬籠を背負った母はビックリするほど足腰が丈夫だった。

家に帰れば、きのこは夕餉の総菜に、枯れ枝や杉の葉は我が家の燃料や暖房になったのである。母はかまどの前にしゃがみ、竹筒でフーフー吹きながら火を焚いた。かまどの口から黒っぽい煙が噴き出したと思ったら、パーツと火がついた。そして目をこすりこすり薪をくべた。燃え殻は消し炭として囲炉裏の熱源となる。  
そんな日常ありふれた光景も今では懐かしく思い出される。

中学を卒業すると私は就職列車に揺られ故郷を後にした。昭和三十年代子供たちはほとんど東京へ東京へとなだれ込むように集団移動したものである。私もまぎれもなくその内の一人であった。6人兄妹の末っ子の私はただただ東京にあこがれて田舎を後にしたのだった。

戦争で焼け出された我が桐原家は、着の身着のまま一家をあげて母の故郷へ逃れてきた。そんな我が家とはかく貧しかった。食べる食材も、どぶ川の岸辺に生える雑草を味噌汁の具に用いたこともあった。それも農家の人から豚のエサが無くなるから採らないでくれなどと言われながらである。父は応召した二年後に一枚の紙切れとなって戻ってきた。母は幼い六人の子供を抱えて必死で働きつづけた。針仕事から田畑の開墾の手伝いや砂利運びなど、土方のような力仕事まで何でもやった。兄妹達も中学を出ると周辺の工場などに就職した。母の苦

労を身近に感じて離れがたかったのだろう。少しでも母の傍で手助けをして苦労を分かち合いたいと子供心に考えた結果だった。そこへゆくと私は幾分のほもと成長したのかもしれない。兄弟のおかげで苦しさも少しは和らいできたが、それでも高校へ進学するだけのゆとりは我が家には無かった。

当時、中学校では卒業生の6割位が就職した。農業従事、家事手伝いを含めてである。私は白線の入った学帽に、金ボタンのついた制服にあこがれた時期もあった。

「帽子がなんだ、あんな金ボタンがなんだ、君たちは一番大切な人生勉強をすることが出来るんだぞ」

先生は理屈をこねて言った。が、私はどっちにしる執着は無かった。それ以上に、東京に出たい、という願望が強かったのである。

就職相談室の壁に張り出された求人票で

私の就職先が見つかった。

そこは東京下町のある電気工事店だった。

従業員は自分を含め4人の小世帯であった。住まいは親方が紹介してくれた三畳一間の古い民家だった。空家を少し改造した貧相な造りだった。他の三人と一つ屋根の下で暮らすことになった。部屋のドアに「桐原繁」と私の名前を書いた小さな真新しい板が掛けられた。電気店の従業員なのに、冬、暖房もなく薄い布団にくるまって寒さを凌ぐしかなかった。雨戸の隙間から肌を刺すような冷たい風が流れ込んできた。夏は夏で風通しの悪い部屋の中で汗びっしょりになった。それをそう苦ともせず過ごせたのは、若さと貧乏暮らしに慣れていたせいだったと思う。食事は親方の家で食べさせてもらったから自炊をしなくてもよく、手間ヒマが省けこれは大変ありがたかった。仕事は、もともと理科や工作などが好きな私には苦痛は感じなかった。見よう見真似で先輩の仕事ぶりから徐々に覚えていった。

三年間くらいは仕事に専念して実家には戻らないと心に決めていた。

就職した翌年、私は夜間の工業高校の電気科に入学した。仕事を進めていくに連れ、その仕事の基礎を学ばねばという気持ちになったのである。見よう見真似で仕事は出来るが応用が利かないことに気づいた。これはキッチンと勉強しなければ追いついていけなくなるという仕事の怖さを感じるようになったのである。

「なあ、シゲ、お前ちゃんと卒業するんだぞ」

口ぐせのように言ってくれた親方の理解もあって、仕事を終えると一目散に学校へ向かった。午後九時過ぎまでの授業で大変だったのは睡魔との闘いであった。家に帰るとあつという間に十一時十二時になっていた。店の仕事は八時からだが、食事もあり七時くらいまでには出勤しておく必要があった。それでも学校生活は同世代の友人らと楽しく過ごすことが出来た。

この間一度も私は故郷に帰らなかったのである。母からは何回か激励の手紙が届いた。あまりうまくない文字が便箋にびっしりと詰まっていた。季節になると果物や野菜なども届けられた。それらを見るたび私はちよっぴり動揺した。帰りたい。でももう少し一人前になった姿を見せてビックリさせたい、そんな揺れる心を抑えながら日々を過ごしていたのだった。

四年間はあつという間に過ぎた。上京してから五年になろうとしていた。

定時制高校を卒業する冬、私は初めて実家に向かうことにした。大晦日まで仕事があったため、元日のお昼近くの汽車となった。朝早く親方への挨拶を済ませ、雷おこしの東京土産を手にし支度をして汽車に飛び乗った。

北へ向かう窓からは徐々に冬の風情が増してきた。故郷に近づくに連れ胸の鼓動が伝わってきた。夕闇につつまれ始めた車窓からの景色がとても新鮮に見えた。汽車は

五年ぶりの故郷の冬景色と夜に向かつてひた走った。冬の日はあるという間に闇夜となった。雪灯かりと山里にぼつんぼつんと浮かび上がる橙色の民家の灯かりが、急に温かく感じられた。そしてその灯かりは吹雪と相俟って車窓に流れ、やがて汽車は五年前と変わらぬ木造の駅舎にたどり着いた。

汽車を降りるとそこは東京とは違った寒さが身体を包んだ。なぜか見知らぬ地に下り立ったような錯覚さえ覚えた。オーバーの襟を立てて横殴りの吹雪に備えた。道路の雪は雪下ろしのせいもあつて道幅を狭く歩みにくくしている。その上にさらに雪は降り注ぎ、車の通る余裕は全く無かった。実家までの1kmほどの底冷えする吹雪の道を踏みしめながら進んだ。駅から離れるにつれ民家も少なくなり、私の身体は吹雪の標的となった。粉雪が顔面にまわりついていた。カバンを持つ素手の指先がかじかんで痛さを通り越して感覚が失せてきた。

少し顔を上げ前方右手を見ると一軒の門灯の灯かりが見えた。そしてその灯りを背に黒ずんだ人影が立っているのが分かった。その人影は私の方へ向かってきた。赤い角巻きを雪化粧させた母だった。駆け寄る母に粉雪が踊っている。

「待ってたよ、お帰りなさい。冷たかったろう」

母は私のかじかむ指先に手を差し出し、しわくちゃだらけの両の手でさする仕草で暖め包んでくれた。道々母は何度か足を滑らせた。その都度私は母を角巻の上から支えた。母の身体が軽く感じられた。

久しぶりの我が家だった。姉姉それに甥や姪たち全員が湧き出るように奥の部屋から出てきた。この五年間、隣の部屋には同僚が居るとはいえ、三畳一間の一人暮らしに慣れた私には、大世帯に戸惑いと嬉しさがこみ上げた。母は囲炉裏端に両膝ついて、「すぐに暖ったまるよ」

と言いながら来るのを見越して暖めてい

た部屋を、さらに暖めるように炭火を重ねた。

「風邪はひかんか？ 元気だったかい？」

と火箸を動かしながら都会暮らしの侘しさを問うのであった。そんな母の以前は何も感じなかった白髪混じりの束ね髪が目にも痛かった。

兄弟六人が揃ったお正月は何にも替えがたい喜びと熱気が溢れていた。食膳を整えた暖まった囲炉裏部屋で、私は五年になんなんとする東京暮らしを東京弁を交えて話して聞かせた。甥や姪の無邪気な振る舞いやワイワイきゃあきゃあ賑やかな声とともに話が弾んだ。母はそんな子供達の会話に黙って相づちを打ちながら満足そうに顔を上気させていた。お酒で赤い顔をした兄が三日には戻らねばならない私に向かって、短い正月休みに不満の言葉を漏らした。「都会ではそう口には出来んぞ、ほらもつと」

と傍らでお椀を手に、母がよそつてくれ

た。熱々鍋の湯気と香りが目にしみた。湯けむりの立ちこめる囲炉裏部屋から廊下に出ると、窓に張り付いていた氷雪がいく筋もの露の流れを作っている。そのあちこちの流れが、みんなの春待つ心を躍らせているようにも思えた。

正月の一日は実に短い。あつという間に東京に戻る日がやってきた。その日の朝は冬には珍しく薄日が差していた。慌しい帰り支度で家の中は騒々しかった。お店の主人へ、先輩の人達へと母は手土産を用意した。

「今度いつ？」

着いたとき以上の荷物を抱え玄関に立つ私に、母が尋ねた。

「お盆にや来れると思う」

笑顔で応え見れば母の目じりに一筋の涙が光っていた。

「これも持っていきな」

最後にもうひとつ紙包みを母が差しだし

た。

故郷の遠い冬の日、亡き母の心情が今もなお私の胸に鮮やかに残っている。

その後、三十数年の間に、私の勤め先は三ヶ所程変わった。直前の会社が倒産したのが七年前。しばらく浪人生活が続いた後、現在の会社に勤めることが出来た。以来、電気工事の現場を渡り歩く生活が始まったのである。しかしその生活ももうすぐ終止符がうたれることになる。定年が目の前に迫っていた。

私を乗せたタクシーは、ほどなく駅に着いた。降り立った私の耳にステーションビルの一角から、リズムカルなクリスマスソングが、そしてしばらく進むとどこからともなく、女性歌手の切々とした歌声が聞こえてきた。

底冷えの  
吹雪の雪道 踏みしめて  
たどる家路の その先見れば  
窓の灯せなに 立つ母の  
赤い角巻き雪化粧  
待ちきれなくて  
駆け寄る母に雪が舞う  
ふるさとの遠い冬の日  
母の喜び今もなお

待ってたよ  
お帰りなさい 冷たかろう  
かじかむ私の 指先触れる  
しわくちやだらけの 両の手で  
さする仕草で暖めて  
包んでくれた  
母の手ざわり鮮やかに  
ふるさとの遠い冬の日  
母の温もり今もなお

囲炉裏端  
すぐ暖まるよ 少し待ってと  
両ひざついて 炭火をかさね  
風邪はひかんか 元氣かと  
三畳ひと間の侘しさを  
氣遣う母の  
白髪まじりの束ね髪  
ふるさとの遠い冬の日  
母の優しさ今もなお

都会では  
口にできぬぞ ほらもつと  
母がよそつた あつあつ鍋の  
湯気と香りが 目にしみる  
窓にはりつく氷雪も  
露と流れて  
春待つところ躍らせる  
ふるさとの遠い冬の日  
母の嬉しさ今もなお

今度いつ  
来る日尋ねる 母の目に  
お盆にや帰ると 笑顔で応え  
見れば目じりに ひとすじの  
涙が光る雪の朝  
これも持っていきな  
母がさし出す紙包み  
ふるさとの遠い冬の日  
母の心情（こころね）今もなお

師走の雪は相変わらず降り注いでいる。

別れはまた逢う日の始め・・・  
再会シリーズ 第3話 終わり